



TITLE:

開会挨拶

AUTHOR(S):

山極, 壽一

CITATION:

山極, 壽一. 開会挨拶. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの挑戦ー地球社会の調和ある共存に向けて (第11回) 「翔ぶ、京大」 --報告書-- 2017, 11: 1-2

ISSUE DATE:

2017-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226431>

RIGHT:

開会挨拶

京都大学総長 山極 壽一



皆さん、おはようございます。第11回京都大学附置研究所・センターシンポジウムの開催に際し、一言ご挨拶申し上げます。

京都大学は1897年に創立され、今年で119年目を迎えます。創立以来、対話を根幹とした自学自習、そして自由の学府というのを伝統にしてきました。その自由の学府って一体何だろうかと考えますと、私はジャングルのようなものだと思っています。私は、長年アフリカでゴリラの研究をしてきましたのでアフリカのジャングル、すなわち熱帯雨林というのをよく知っています。熱帯雨林というのは、地球の陸上で一番生物の多様性が高い場所です。つまり、おびただしい種類の生物が、そこに住んでいる。しかも、どんどん新しい種が生み出されている場所でもあります。そして、いろんな生物の種同士が、お互いのことをよく知っているわけではない。しかし、全ての生物が我が世の春を楽しんでいる。世界で一番、自分が偉いと思っているわけです。そういう場所が京都大学であって、京都大学というのは、非常にたくさんの種類の学問が、そこで息づいています。そして、その学問をしている人たちは、自分が世界で一番偉いと思っているわけです。世界最先端の研究を今、自分はしようとしている。あるいは成し遂げていると皆さんは切磋琢磨しています。でも、お互いのことをよく知っているわけではない。その事情を一番知っているのが総長の私でありまして、そのさまざまな多様な学問を生かしつつ、いかに新しい学問を生み出せるかということを常に考えているわけです。その最先端を担っていただいているのが、実は、この附置研究所・研究センターの研究者の皆さんです。京都大学の附置研究所・研究センターは全部で22ございまして、全国各地に散らばっております。北は北海道から南は鹿児島までさまざまな場所で研究が営まれています。お互いにあまり会う機会はありませんが、世界で皆さんが活躍されている。ですから新しい風を、いろいろ学内に吹き込んでいただいて、そしてまた、それを世界に広げていただくということをしているわけです。そういう先生方が一堂に会して、自分たちの研究成果を皆さんにお伝えするということは、京都大学の大きな使命だと思っております。まさに対話を根幹とする自由の学府というところを、今日はじっくりと味わっていただきたいと思います。思っております。

22の附置研究所・研究センターと申し上げましたが、理学・工学、医学・生物学、人文・社会学といった非常にさまざまな分野にわたっております。この国内外の学術研究をリードする先端的・学際的・基盤的課題に取り組んでいるということは、まさに新しい種を生み出すように、新しい知を生み出す研究活動であるということでもあります。実際にこれまで何人ものノーベル賞受賞者を京都大学は輩出しておりますが、その中には、研究所で研究をされた先生方も含まれております。そして日本で3つのうち2つのフィールズ賞の受賞者も、京都大学から出ているということで、大変私は誇りに思っているところでございます。

それから、この附置研究所・研究センターの多くは、学内という枠を超えて、国際的なリネージを持っていて、さまざまにプラットフォームをつくって研究をされております。そういった連携・研究を通じて協力関係を築きながら、自ら生み出した研究成果を本学の研究・教育活動として社会に還元をしているわけです。

また、これらのうち、18の附置研究所と研究センターが文部科学省認定事業「共同利用・共同研究拠点」として、それぞれの国内外の研究者コミュニティの研究活動に貢献しております。京都大学以外のさまざまな機関から研究者が毎年やってきて、協力関係を結びながら共同研究を実施するというシステムを持っているということです。

そして、附置研究所と研究センターは、京都大学附置研究所・センター長会議をベースにして、Kyoto University Institutes and Centers、K U I Cという連携基盤を結びました。これまで、この連携基盤をもとに、京都以外の中核都市で毎年シンポジウムを開催してきました。これが11回目になります。

私は、京都大学の発展を目指して「大学は窓である」ということを言い続けておりまして、窓にちなんで WINDOW という標語を掲げました。この WINDOW というのは、最初の W が Wild and Wise、タフで賢い学生をみんなで共同して育てていきたいと思いますということ、I は International and Innovative、N は Natural and Noble、D は Diversity and Dynamic、O は Originality and Optimism、最後は Women and Wish です。まさにその標語を常に実施していただいているのが、この附置研究所・研究センターの研究者であると思っております。

この連携基盤は、平成 27 年 4 月に結成されました。本日は、この研究連携基盤の研究の一端も紹介させていただこうと思っております。午前の講演として、生存圏研究所からオーロラ研究、防災研究所から乾燥地の気象学、原子炉実験所から福島を見守る「目」、午後は i P S 細胞研究所より R N A がスイッチになるお話、人文科学研究所より江戸時代の古文書研究、そして野生動物研究センターより、アマゾンのフィールド研究のお話をさせていただく予定でございます。

本シンポジウムの目的は、次の世を明るくするために、京都大学の研究者が語りかけるということです。「翔ぶ、京大」、飛び立ってもらって、帰ってこなかったら困るんですけども、まさに世界に羽ばたく京大ということで、最先端の研究を紹介させていただこうと思っております。我々研究者は、どちらかというと研究の世界の中に閉じこもりがちなんですけれども、そうではなくて、社会に対するリスペクトを持って、この地球という大地を希望の地にできると信じて研究を実施してしようとしております。まさに、その姿をご覧くださいければと思います。

とりわけ、本日は多くの高校生の諸君もご来場いただきました。次の世代を担う高校生諸君にとって、本日の発表が、これからの自分たちの道を考える際に大きな参考になってくれればというふうに思っております。ぜひ、この「翔ぶ、京大」に耳を傾けていただきたいと思います。本日は、ご来場どうもありがとうございました。